

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月10日現在

機関番号：12613

研究種目：若手研究（A）

研究期間：2009～2012

課題番号：21683004

研究課題名（和文）観光・移住・メディアがもたらす地域イメージと文化変容に関する社会学的研究

研究課題名（英文）The Sociological Study on Local Images and Cultural Changes made by Tourism, Migration and Media

研究代表者

多田 治 (TADA OSAMU)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：80318740

研究成果の概要（和文）：

私は自身の沖縄研究を、よりグローバルな文脈に位置づける必要性を自覚し、環境・資源・格差・金融・軍事・メディア等の問題群が複雑にからみあうグローバル化を、よりトータルに理解する視座を形成した。それを基礎に、沖縄をハワイ・グアム・宮崎などの他地域と比較し、影響関係を把握した。軍事化された場所が観光地化されもした点で、ハワイ・グアムと沖縄の類似性や相関関係の実態が、歴史的に明らかになった。そして沖縄の楽園イメージの形成には、ハワイにおける移住と観光、メディアが連動しあって影響を与えてきたことがわかった。

研究成果の概要（英文）：

I reflected my study on Okinawa in terms of global contexts and formed the perspective to understand globalization in more total aspects; environment, resources, inequality, finance, military and media. On the basis of this global perspective, I compared Okinawa with other areas like Hawaii, Guam and Miyazaki, and inspected their interactive relationship. In that some militarized places also became tourist sites, I understood the similarity among Hawaii, Guam and Okinawa. And it became clear that migration, tourism and media in Hawaii interactively had a great influence on the formation of Okinawa's paradise images.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,400,000	420,000	1,820,000
総計	5,600,000	1,680,000	7,280,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：沖縄、イメージ、観光、ハワイ、メディア、グローバル化、アイデンティティ、移動

1. 研究開始当初の背景

ジョン・アーリ『社会を越える社会学』やアルジュン・アパデュライ『さまよえる近代』が示すように、グローバル化と移動性が高ま

った今日の状況は、もはや安定した固定的な「社会」「構造」を前提できず、「ネットワーク」「フロー」のイメージで見ていく方向へ、社会学そのものが根本的な枠組みの変容を迫られている。国民国家などの境界空間内に

画定された society から、越境的な移動性や不定形な流動性・液状化を基調とする mobility への視点のシフトである。

そんな中、場所はいかに変容するか。グローバルな移動の増大とともに、ローカルな場所の意味づけは大きく変わり、経済生活や伝統文化、環境保全などにおいて、場所のアイデンティティが逆説的に重要度を増す。移動と場所の結びつきは、今日の社会科学の主要テーマの一つである。

私はこれまで沖縄をフィールドとして、観光・移住ブームに焦点を当て、歴史社会的な文献調査とフィールドワークを通して、沖縄イメージの形成と社会変容の過程を明らかにしてきた。平成 18-20 年度科研費の研究では、対象を八重山諸島にしぼって調査を進めた。マストツーリズムを乗り越えた人が、より濃密さを求めてリピーター化し、移住する人もいる。ロングステイやセカンドハウスなど、観光と移住の中間形態も多様化している。当初はもっぱら観光を対象にしていたが、いまや観光と移住はなだらかにつながっており、セットで扱う必要があることがわかった。

私はこの方向をさらに深め、観光・移住に代表される移動現象が、メディアと連動していかに場所のイメージを形成し、ローカルな文化を変容させていくのかを明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

私はこれまでの自身の沖縄・観光研究を、よりグローバルな文脈に置きなおし、他の地域・問題群と比較し、関係づける必要性を認識し、グローバル化の研究基盤を形成することを、この期間の研究目的の一つに据えた。

観光・メディア・博覧会・博物館などのビジュアル文化において、いかなる地域・国家のイメージが提示され、別の面が背後に隠れながら残されてきたか。グローバルな移動とまなざしが増大する中、場所のローカルな文化はいかに変容してきたのか。その際、移住者や先住民、メディアはどのような位置と役割を与えられてきたか、比較研究から明らかにしたいと考えた。

沖縄における基地とリゾートの二重性の現実を理解するには、沖縄を単体でなく、ハワイやグアムなどの類似・先行地域との対比や連続性でとらえた方がよい。これらの軍事化された場所は、観光地でもある。それらはいかなるイメージを与えられ、観光化されてきたか。観光と移民という移動現象によって、地域の特性やイメージ、先住民の生活はどう組み変えられてきたか。

こうした具体的なエリア・歴史の比較検証を通して、これまで進めてきたグローバル化の基礎研究に、より具体的な内実を与えたい。

特定の場所を起点に、歴史と地理、時間と空間を広げる中で、ローカルとグローバルの関係、移動、そして資本主義・植民地主義・先住民・近代・制度・支配・差別などの問題圏を、トータルかつ関係論的にとらえる理論的・現実的なパースペクティブを模索・確立し、多方面の研究に応用可能なものとして提示したいと考えた。

3. 研究の方法

グローバル化についての研究基盤の形成に本格的に取り組み、具体的な知識の整理と視座の形成を、継続的に行ってきた。観光・移住・メディア等の問題を扱うに際しても、環境・資源・南北格差・金融・戦争・メディア等の問題群が複雑にからみあうグローバル化の諸様相を、よりトータルに把握する視座を形成しておく必要があった。

それを基礎に、グローバルな移動の増大とメディアの伝達により、ローカルな場所の変容とイメージ形成がいかに進むのかについて、検討を行った。

具体的な事例として、国内では従来から継続して、沖縄の観光・移住・メディア・文化・基地問題などを主に扱い、データの収集・分析を行った。またグローバルな比較の対象として、台湾の映画と観光、イギリス（ロンドン・湖水地方）・パリ・上海の観光・博覧会・博物館、マーシャル諸島の軍事と観光、カリフォルニア・ハワイ・グアム・北マリアナ諸島の先住民・移民と観光などについて、現地調査を含めた資料収集とヒアリングを行い、沖縄・日本との類似点や相違点を検証した。

個々の時期のより個別的な方法については、次項の研究成果のなかで言及していくことにする。

4. 研究成果

(1) 1 年目の 2009 年度は、まず 6 月に韓国で沖縄映画のシンポジウム報告があり、準備を行った。約 70 本の映画から「6 類型プラス 2」の沖縄イメージを抽出し、特徴や変遷を記述した。観光・移住のテーマ・目線も含まれ、関連づけて把握した。シンポでも韓国の研究者と意見交換を行った。

また、それまでに学生と行った沖縄・八重山諸島での観光・移住調査の報告をまとめた暫定版報告書をもとに、7 月に国際シンポジウムでセッション「観光と環境、文化と自然の社会学」を行った。8 月には自分の調査報告「八重山の観光と環境・文化・景観」を執筆して 8 月版報告書に所収、ウェブで公開、関係者に報告した。観光と移住、地元民と移住者、観光と環境、文化と自然など、概念上は区別される諸要素が、実際には多様に結び

つく実態を見出した。

9月には石垣島・西表島・竹富島で調査を行い、現地の観光従事者に島の現状・歴史の聞きとりを行った。また、これまでに行ったアンケート調査の量的データをもとに論文「ショッピングモール・沖縄イメージと生活感覚」を書き、郊外化と観光の観点から地域イメージの形成を、数量的に検証・考察した。

10月から、私は自身の沖縄・観光研究を、グローバルな文脈に位置づける必要を自覚し、グローバル化の研究基盤を形成し始めた。環境・資源・南北格差・金融・戦争・メディア等の問題群が複雑にからみあうグローバル化を、よりトータルに把握する視座を形成した。世界・アメリカとの関係に沖縄を位置づけ、1~2月に論文「沖縄と平和——軍事大国アメリカとどう向き合うか」を執筆した。普天間基地移設報道と映画論の知見は、一般誌のテーマ連載「メディアと沖縄イメージ」に書く機会を得て、沖縄の基地問題や報道のあり方を広く世に問うた。

3月にはイギリスへ出張し、ロンドンと湖水地方で、観光・風景等の資料収集を行い、比較の視点を得た。ロンドン大学でこれまでの研究成果報告を行い、観光開発・博覧会・軍事等に関する意見・情報交換を行った。

(2) 2年目の2010年度も、自身の沖縄・観光・イメージ等の研究をグローバルな文脈に位置づける必要から、グローバル化の研究基盤の形成に取り組んだ。環境・資源・南北格差・軍事等が複雑にからみあうグローバル化を、よりトータルに把握する作業を継続した。7月には国際シンポジウムで成果報告を行い、他の報告者のイラン・フィリピンなどと沖縄・日本を比較し、関連づける議論を深めた。

8月上旬には瀬戸内国際シンポジウムに出席し、犬島での分科会「里海から多島海へ」で、沖縄・瀬戸内・フィリピン・太平洋をつなぐ横断的な議論を通して、島と海の視点から世界をとらえ返す知見を得た。芸術祭の一環たるシンポ全体からも、アートと観光による島おこしの知見を得た。

8月下旬には中国・上海へ行き、万博・観光・都市の発展状況を視察し、話を聞いた。続いてフィリピンへ行き、マニラとダバオで貧困や対日関係の歴史・現状を見学し、話を聞いた。これらローカルな場所でのフィールドワークも、グローバル化の研究視点を豊かにし、沖縄・南洋等を考えるヒントを得た。

また8~9月には沖縄・観光に関する複数の原稿を執筆し、今年度の知見を含めて研究成果をまとめた。

11月には台湾映画、および東アジアのエスニック観光という2つのシンポで研究報告を行った。10月に台湾へ行き、メディアと観光の結びつき、植民地時代とノスタルジア、

多文化・多言語状況などの重要な見聞を得た。エスニック観光のシンポでは、見せる側のアイデンティティと結びつく事例を多く得た。12月にはマーシャル諸島研究のグレッグ・ドボルザーク氏の公開セミナーを開き、太平洋と日本・沖縄をつなぐ協同作業の射程が開けた。以後も院生数人を含め、パンフィック・スタディーズの研究会を行った。

1月にはアメリカ・UCサンタバーバラで沖縄の研究報告を行い、観光・軍事に関する意見交換を行った。これをもとに、3月に再びアメリカへの研修出張の機会を得て、グローバル化の研究基盤の形成を実地で行った。

(3) 3年目の2011年度もひきつづき、自身の沖縄・観光・イメージ等の研究をグローバルな文脈に位置づける基礎研究に取り組んだ。4月にはアメリカへの研修出張を続けて、UCサンタバーバラでこの作業を行った。

帰国後、5月には台湾と沖縄の映画・イメージの比較分析を行い、研究成果を論文にまとめた。また5月からは東日本大震災と原発事故をうけて、核の軍事利用と平和利用の二重性について文献調査を行い、太平洋のマーシャル諸島や米本土のネバダ州、日本国内の原発導入、沖縄の核密約などの問題を関係づけて考察し、7月に学会シンポジウムで報告し、沖縄や核の問題をよりトータルに関連づけて考える必要性を議論した。

6月中旬には中国・上海でグローバル・コンソーシアムに出席し、そこでの情報交換と研究者交流から、グローバルな文脈の中に自分の研究を位置づけた。8~9月には社会学理論やグローバル化の基礎となる知見をまとめ、11月に単著『社会学理論のエッセンス』を出版し、広く伝える機会を得た。

10~1月には新刊本『ショック・ドクトリン』の講読と並行して、ネオリベラリズム・TPP・911テロ・災害バブル・イラク戦争・金融恐慌・沖縄核密約などの多様なトピックを掘り下げの中で、グローバル化の複雑な諸問題をよりトータルに把握する作業を行った。

12月末から私は、沖縄との比較対象としてハワイに注目し始めた。12月末~3月上旬に基礎文献・先行研究の収集・整理・読解を行い、3月に2週間現地へ行き、資料収集とフィールドワークを行った。軍事化された島が、観光地にもなったという共通点から、沖縄をハワイやグアムとの対比や連続性でとらえる射程を得たことで、地理的・歴史的な広がりや深みを確保し、これまでのグローバル化の基礎研究に具体的な内実も与えられた。

3月末には沖縄の復帰40年国際シンポジウムで、基地問題のセッションで司会とコメントーターを務め、上記のハワイ・グアム・沖縄に関する知見を提示して議論を深めた。

継続的なグローバル化の基礎研究に依拠

しながら、沖縄とハワイの比較研究の視座を得られ、作業を進められたことは大きい。文献研究と現地調査、研究成果報告のサイクルを繰り返し、着実に前に進められた。グローバルとローカルの関係や、観光・移民・メディア・イメージ形成・文化変容などの諸問題に向けて、沖縄とハワイの比較研究に着手できた点が収穫である。

(4) 4年目・最終年度の2012年度もひきつづき、自身の沖縄・観光・イメージ等の研究をグローバルな文脈に位置づけてきた。特に2012年度は、沖縄をハワイ・グアム・サイパン・宮崎などとの類似性・連続性においてとらえた。比較や影響関係の視座から、複数の地域を関連づけた点は新しく、意義深かった。

7月まで、ハワイに関して収集した資料の読解・整理を進め、講義で知見を提示した。これをもとに7月末～8月にはハワイへ、9月上旬にはグアム・サイパンへ行き、資料収集とフィールドワークを行った。沖縄を考える際にも、国内に限定せず、地理的・歴史的な広がりや深みを展開するに至った。「軍事化された場所が、観光地化されもする」ことに関する具体的な素材を、現地調査から豊富に得た。

だが、復帰後の沖縄の楽園イメージと観光立県には、海外だけでなく国内の他地域からの流れもあり、特に「南国」宮崎の新婚旅行ブームの南下は、沖縄観光を慰霊参拝から楽園観光に転換させた点で決定的であった。私は9～10月に、11月のウィーンでの国際シンポジウムの報告準備を進め、この宮崎観光の影響を組み込んで報告した。国内と海外、両方の流れや関係性のなかで、沖縄の変容をとらえ返した。

12月には市民講座の場を活用し、ハワイと沖縄を観光だけでなく、戦争・軍事の面からの考察も盛り込み、それらの重層的な関連を示した。一方、同月の衆議院の解散総選挙の際、沖縄の地元テレビの選挙報道について論じる機会を与えられ、地元メディアが基地問題や経済振興などの政策と世論の関係をどう報道したか、実証的に細かく検証した。

3月上旬には、宮崎で資料収集と聞きとり、参与観察を行い、11月に始めた宮崎観光の歴史を、より具体的に理解した。3月中旬～下旬には再びハワイへ出張し、本研究とテーマが合致する“paradise workshop”で研究報告を行い、沖縄とハワイの影響関係について情報交換と研究交流を行うとともに、現地ではしか得られない情報収集を行い、移住と観光、メディアが密接に連動して楽園イメージを形成してきた歴史を把握した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 多田治、「沖縄イメージの形成と展開」、『歴博』、査読無、国立歴史民俗博物館、175号、2012年、特集「沖縄 自然・開発・イメージ」、16-19ページ

[学会発表] (計10件)

① Osamu Tada, “From Hawaii to Okinawa: The Expansion of the Paradise Image and Tourism beyond Time and Place”, Paradise Working Group, 2013年3月16日、アメリカ、ハワイ大学 (招待講演)

② Osamu Tada, “From Hawaii to Okinawa: The Expansion of the Paradise Image and Tourism beyond Time and Place”, International Okinawa Conference, “40 years since reversion: Negotiating the Okinawan difference in Japan today”, 2012年11月2日、オーストリア、ウィーン大学 (招待講演)

③ 多田治、セッション「米軍基地が地域社会に及ぼす影響——辺野古・高江・グアム」司会・コメンテーター、復帰40年沖縄国際シンポジウム「これまでの沖縄学、これからの沖縄学」、2012年3月31日、早稲田大学 (招待講演)

④ 多田治、「3.11 以後の沖縄論—平時と軍事のグローバルな二重性—」、第63回早稲田社会学会大会シンポジウム「沖縄のローカルとグローバル」、2011年7月9日、早稲田大学 (招待講演)

⑤ 多田治、「エスニック観光と沖縄イメージ：3つの時代の博覧会」、国際シンポジウム「観光から見る東アジアのエスニシティと国家」、2010年11月6日、金沢大学 (招待講演)

⑥ 多田治、「台湾・沖縄・日本——越境の視点から」、国際シンポジウム「東アジアの越境・ジェンダー・民衆—ドキュメンタリーと映画から見た日台関係の社会史—」、2010年11月3日、一橋大学 (招待講演)

⑦ 多田治、「里海から多島海へ」コメンテーター、瀬戸内国際シンポジウム・犬島セッション、2010年8月7日、犬島自然の家 (招待講演)

⑧ 多田治、「普天間基地問題と軍事大国アメリカ——「移設」というイデオロギーを超えて」、国際シンポジウム「Cultural Typhoon 2010」、セッション「グローバル帝国の戦争・経済・メディア—イラン・フィリピン・アメリカ・日本・沖縄の時空をつなぐ—」、2010年7月4日、駒澤大学

⑨ 多田治、「文化の科学と政治性のクロスボーダー——Cultural Typhoon 2004 in 沖縄から」、Inter-Asia Cultural Typhoon 2009、2009年7月5日、東京外国語大学(招待講演)

⑩ 多田治、「沖縄イメージを旅する、映画編——日本の映画は沖縄をどうまなざしてきたか」、シンポジウム「沖縄映画、沖縄アイデンティティ：映画—地域／歴史研究との遭遇」、2009年6月27日、韓国・ソウル、KOREAN FILM ARCHIVE(招待講演)

[図書](計6件)

① 多田治、「ショッピングモールと沖縄イメージ—郊外化と観光の浸透にともなう県民の生活実感—」、安藤由美・鈴木規之編『沖縄の社会構造と意識—沖縄総合社会調査による分析—』、九州大学出版会、2012年、99-124ページ(324ページ)

② 多田治、『社会学理論のエッセンス』、学文社、2011年、早稲田社会学ブックレット・社会学のポテンシャル7、150ページ

③ 多田治、「台湾映画と沖縄映画を照らしあう—『海角七号』と『悲情城市』、『ナビィの恋』と『ウンタマギル—』のアナロジー論」、星野幸代・洪郁如・薛化元・黄英哲編『台湾映画表象の現在—可視と不可視のあいだ』、あるむ、2011年、105-133ページ(255ページ)

④ 多田治、「映画のなかの沖縄イメージ—その複線的な系譜」、岩崎稔・陳光興・吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズで読み解くアジア』、せりか書房、2011年、222-236ページ(316ページ)

⑤ 多田治、「観光を社会的にとらえるエッセンス—沖縄イメージ研究の立場から」、遠藤英樹・堀野正人編『観光社会学のアクチュアリティ』、晃洋書房、2010年、40-59ページ(220ページ)

⑥ 多田治、「沖縄と平和——軍事大国アメリカとどう向き合うか」、平和と和解の研究

センターCsPR／足羽與志子・濱谷正晴・吉田裕編『平和と和解の思想をたずねて』、大月書店、2010年、89-114ページ(352ページ)

[その他]

・学会以外の口頭報告

多田治、「楽園幻想と開発・軍事の比較社会学—ハワイと沖縄を中心に」、一橋大学連続市民講座2012「戦争と暴力—社会科学からのアプローチ」、2012年12月、一橋大学兼松講堂

Osamu Tada, “Touring the History of Okinawa Images: On the Duality of Military Bases and Tourism”, 特別レクチャー、2011年1月、アメリカ、UCサンタバーバラ

Osamu Tada, “Travelling Okinawa Image: from Yanagita Kunio to the Migrant Boom”, 特別レクチャー、Japanese Cultural Creative Industries, 2010年3月、イギリス、ロンドン大学バークベック・カレッジ

多田治、セッション「観光と環境、文化と自然の社会学—沖縄・八重山諸島のフィールドワークから—」コーディネーター、Inter-Asia Cultural Typhoon 2009、2009年7月、東京外国語大学

・調査報告書

多田治編、『観光と環境、文化と自然の社会学—沖縄・八重山諸島のフィールドワークから—』、2008年度一橋大学多田治ゼミナール沖縄・八重山調査報告書 第2巻、2009年8月版

多田治、「八重山の観光と環境・文化・景観」、多田治編『観光と環境、文化と自然の社会学—沖縄・八重山諸島のフィールドワークから—』、2009年、256-282ページ

・一般雑誌記事

多田治、「沖縄 基地問題への関心に中央との隔たりあり」、『GALAC』、NPO 法人放送批評懇談会、2013年3月号、特集「2012年選挙報道を問う」、27-29ページ

多田治、「メディアと沖縄イメージ(2) 映画における沖縄イメージの変遷」『GALAC』、NPO 法人放送批評懇談会、2010年6月号、

多田治、「メディアと沖縄イメージ(1) 普
天間基地移設報道をめぐる」『GALAC』、NPO
法人放送批評懇談会、2010年5月号、32-35
ページ

多田治、「ツーリストの視点で見た『沖縄イ
メージ』を通じて日本を問う(研究室訪問)
『HQ』、一橋大学、2010年、26号、20-
21ページ

多田治、「沖縄イメージの内と外」、『momoto
モモト』、編集工房東洋企画、2010年、創刊
号、特集「ところで、あなたは、沖縄に対し
て、どんなイメージを持っていますか?」、
55ページ

多田治、「年に何度も沖縄に通い 暮らすよ
うに楽しむ人たち」、『Coralway』、日本トラ
ンスオーシャン航空、2009年11・12月号、
特集「沖縄 本をめぐる冒険」、28ページ

・新聞記事

多田治、「復帰40年 時の標(11-12) 沖
縄イメージ 上・下」、『沖縄タイムス』、2012
年5月28・29日

多田治、「韓国・ソウルでの沖縄映画シンポ
ジウムに参加して」、『沖縄タイムス』、2009
年7月17日

多田治、「リゾートと伝統文化2 多面的視
点養う好機に 観光をとらえ返すヒント」
『沖縄タイムス』、2009年5月4日

・辞典項目執筆

多田治、「美ら海とおばあー沖縄イメージを
旅する」『日本とアジア・人の移動事典』、丸
善、2013年秋刊行予定(印刷中)

多田治、「カルチュラル・スタディーズにお
ける観光」、「沖縄：海のイメージ、観光のま
なざし」、安村克己・堀野正人・遠藤英樹・
寺岡伸悟編『よくわかる観光社会学』、ミネ
ルヴァ書房、2011年、116-117、166-167ペ
ージ

多田治、「ポストコロニアル文化」日本社会
学会 社会学事典刊行委員会編『社会学事典』、
丸善、2010年、622-623ページ

・書評

多田治、杉本久未子・藤井和佐編『変貌する
沖縄離島社会—八重山にみる地域「自治」』
(ナカニシヤ出版) 書評、『沖縄タイムス』、
2012年9月29日

多田治、下川裕治・仲村清司著『新書・沖縄
読本』(講談社現代新書) 書評、『沖縄タイム
ス』2011年5月21日

多田治、ピエール・ブルデュー著『科学の科
学—コレージュ・ド・フランス最終講義』(藤
原書店) 書評、『週刊読書人』、2010年12月
17日

・ホームページ

多田治、「多田治のおしごとブログ OSAMU
TADA's WORK」
<http://d.hatena.ne.jp/tada8+work/>

多田治、セッション「米軍基地が地域社会に
及ぼす影響」と報告へのコメント、「復帰40
年沖縄国際シンポジウム報告書」142ページ
[http://okinawasymposium.files.wordpress.com
/2012/11/houkokusho20122.pdf](http://okinawasymposium.files.wordpress.com/2012/11/houkokusho20122.pdf)

多田治編、2008年度一橋大学多田治ゼミナ
ール 沖縄・八重山調査報告書第2巻『観光と
環境、文化と自然の社会学—沖縄・八重山諸
島のフィールドワークから—』2009年8月版
<http://homepage2.nifty.com/tada8/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

多田 治 (TADA OSAMU)
一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号：80318740

(2) 連携研究者

熊本博之 (KUMAMOTO HIROYUKI)
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：80454007

(3) 研究協力者

須田佑介 (SUDA YUSUKE)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士後期
課程 (リサーチアシスタント)